

チューター活動における日本人学生と留学生の異文化間理解

—— チューター活動実施後アンケートの自由記述分析から ——

園 田 智 子

要 旨

チューター制度は、日本人学生、留学生双方にとって異文化理解の重要なきっかけとなる制度であり、教育的意義も大きいと考えられているが、一対一の関係性であるからこそその難しさもあり、制度の運営には段階的で柔軟な支援が求められている。

本稿では、群馬大学における過去4年分の留学生と日本人チューターの活動後アンケートの自由記述をもとに、双方の学生が、肯定的評価・否定的評価の両面からチューター活動を通してどのような異文化間理解を得たのかを明らかにする。一方、ペアの具体的記述からチューター活動において双方にどのようなすれ違いや認識のずれがあったのかを調べ、今後必要とされる支援について考察する。

【キーワード】 チューター活動 異文化理解 認識のずれ アサーティブコミュニケーション

1. 調査の背景とチューター制度の概要

1.1. 調査の背景

日本の各大学において留学生の学習や生活を支援するための試みは様々に行われているが、中でも、チューター制度は大きな役割を期待されているものの一つであろう。入学直後の留学生にとって日本人チューターの支援は、学習へのスムーズな導入というだけでなく、学内での人間関係を広げ、大学生活へ適応するための機能を担っていると考えられる。しかしながら、チューター制度は、チューターの役割や仕事内容の不明確さが原因で混乱や期待はずれが生じること(LASSEGARD、2005)や、留学生とチューターの関係性の維持の難しさや、両者における認識のずれがあることも指摘されている(伊藤、2006・新倉、2000)。

本学におけるチューター活動でも、活動が活発に行われているペアもあれば、あまり活動が行われないまま終わってしまうペアもあり、また、開始の段階や活動途中の段階で困難を感じて留学生相談室を訪れるチューターや留学生もいる。

そこで本稿では、本学のチューターと留学生がチューター活動をどのように捉えているのか、過去

のデータを分析することにより、肯定的評価・否定的評価を両者の視点から明らかにすることとした。さらに、留学生とチューターのペアで提出されていたアンケートをもとにペアの間での具体的な認識のずれについても考察する。

1.2. 本学におけるチューター制度

本学においては現在すべてのキャンパスでチューターによる留学生支援が行われているが、そのシステムはキャンパスごとに若干異なっているため、本稿では過去のアンケートなどデータの蓄積のある文系学部のあるAキャンパスのチューター活動に限定して分析を行うこととした。

〈チューター活動の目的〉

本学のチューター活動の目的は、「留学生の学習の補助及び生活の助言のため」と、学業の支援を基本にしている。ただ、実際には柔軟に生活上の支援や、学外、休日の付き合いも含めた友人としての深い交流をもっているペアもいることがアンケートの内容からうかがえた。

〈チューター制度の対象者〉

チューター制度の対象となる留学生は「原則として本学に在籍する入学後2年以内の学部留学生及び入学後1年以内の大学院留学生、研究生、及び特別研究学生」である。一方、チューター資格は「群馬大学に在籍する正規の日本人学生で留学生の専攻する分野に関連のある科目を履修する学生」としている。なおチューターには大学規定の謝金が支給されている。

〈チューターの募集〉

チューターの募集は、半期ごとに教官からの推薦及び一般募集を行っている。一般募集は登録が多いときと少ないときがあり、安定したチューターの確保という点については未だ問題を抱えている。一方、留学生に対しては、新入生全員一律にチューターを配置することはせず、オリエンテーションや日本語の授業の際に繰り返しチューター制度の概要と意義を周知し、自主的に国際交流課の窓口でチューター希望申請書を提出するシステムになっている。これは、留学生が受身ではなく、自ら積極的にチューター活動に取り組むよう考慮されたシステムであり、留学生の中には、入学後仲よくなった日本人学生にチューターとなってくれるよう直接依頼してペアが形成される様子も見られた。

〈チューター活動の時期〉

基本的に、前期は5月から7月の3ヶ月間、後期は10月から1月の4ヶ月間を活動期間としている。各学期とも最大45時間の活動枠は設けられているが、活動の頻度や回数及び内容に関しては基本的にペアごとの計画と自由裁量で進められている。各月ごとに簡単な実施報告書類への記入が義務付けられている。

〈開始時と活動中のサポート〉

平成19年度に筆者が着任してからは、基本的にチューター活動に参加するチューター、留学生全員にオリエンテーションへの参加を呼びかけている。オリエンテーションでは、事務手続きなどの説明だけでなく、チューター活動におけるトラブル事例を紹介して具体的解決策をペアで話すなど異文化

間コミュニケーションに関する簡単なレクチャーも行っている。また、ペアのマッチングや活動計画についての相談も受けている。さらに活動中は留学生相談室で随時チューター・留学生双方の相談を受け付け、必要に応じてアドバイスをしている。

2. データの概要と調査分析の方法

2.1. データの概要

今回の調査では、同じ質問項目で統一されていた平成17年度前期から平成19年度後期のチューター活動実施後アンケートの自由記述部分を対象とした。3年間で合計189名分、そのうち日本人チューターが122名で留学生のデータは67名分であった。

分析対象にした質問項目は、チューター側は、「1. チューター活動で得たもの、学んだこと、楽しかったことは?」「2. 難しいと感じたこと、困ったことは?」「3. 後輩チューターへのアドバイス」の3項目、留学生側は、「1. チューターにしてもらって助かったことは?」「2. チューターとのコミュニケーションで困ったことは?」の2項目である。

2.2. 分析の方法

分析の方法は以下の1) から3) の通りである。

- 1) 自由記述部分の質問項目について、それぞれ日本人チューター、留学生に分け、19年度分の自由記述の中からまとまった語彙や短文で表現でき抽象化できるカテゴリーを作成する。
- 2) 189人分のデータについて1) で作成したカテゴリーに分類できる記述を抽出し、年度ごと及び総数をカウントする。
- 3) データについて自由記述の具体的な記述と合わせて、その傾向から結果を考察する。

3. 日本人チューターの学びと問題点

アンケートの分析結果のうち、日本人チューターがチューター活動で得たもの、学んだこと、及び、チューター活動における問題点は以下の通りである。

3.1. チューター活動で学んだこと

まず、日本人チューターは、チューター活動でどのようなことを学んだのだろうか。表1は日本人チューターの自由記述に見られたチューターの学びである。

表1 日本人チューターの学び

学びのカテゴリー	H17	H18	H19	計
1. 他国事情を知る	29	9	23	61
2. 差異を見つける (文化差・個人差)	9	8	12	29
3. 共通性を見つける (文化的・個人的)	4	4	3	11
4. 友情の成立	11	5	8	24
5. 日本文化への客観的視点	10	4	6	20
6. 日本語の再考・再学習	8	7	11	26
7. 自己の学習 (学習スキル・復習・外国語・専門)	11	4	6	21
8. 自己成長 (視野の拡大・自己発見・コミュニケーション能力の発達)	8	2	7	17
9. 他国への興味の伸長	1	3	4	8

(複数回答あり)

〈具体的な記述内容〉

- ・M国の人とはじめて話した。文化や宗教についていろいろ教わってとても勉強になった。改めて日本には宗教がないと感じた。 (1. 他国事情 5. 日本文化客観的視点)
 - ・A国は同じアジアでも日本とは考え方や生活様式が異なることがわかった。 (2. 差異)
 - ・一緒に勉強していて、同じ問題について話し合っても、考え方が違ったりしておもしろかった。 (2. 差異)
 - ・同じくらいの年の人はどこの国の人も似たようなことを考えていると思った。 (3. 共通性)
 - ・留学生の友人が増えたので、プライベートで遊んだりして楽しく過ごせた。 (4. 友人)
 - ・自分が普段使っている日本語がそもそも正しいのかと考えるようになった。 (6. 日本語)
 - ・相手に教えることで自分がどのくらい理解しているか確認できるいい機会だった。 (7. 自己学習)
 - ・自分の国の制度や方法がすべてではないということ、自分の世界の小ささを知った。 (8. 自己成長)
 - ・外国に行くことに興味がなかったが、活動を経験してAさんの国へ行ってみたいと思うようになった。 (9. 他国への興味)
- () 内筆者加筆

留学生との異文化接触によって日本人チューターは様々な学びを得ていることがわかる。中でも件数が多いのは、「他国事情を知る」で、相手の国の文化習慣をたずねたり、留学生から教えられたりしている様子が見える。

次に件数が多いのは、「差異を見つける」である。櫻田・島・松下(2000)は、「異なるものへの気づきが異文化理解への第一歩であり、それは、自文化への理解を即すことにもなる」と述べているが、アンケートでも、「お互いの違いを話し合うことがとても楽しかった。」「日常生活の中のささやかな違

いについて話すのは発見が多くおもしろかった。」など、その違いを発見として楽しみながら活動をしていることがわかる。また、「国によって見方が違うんだということ、また、意外なところに共通点を見つけることも。」と差異の発見とともに共通性を認識しているチューターも多かった。

チューター活動が自分の学習にも役立ち、さらに自己成長へつながっていると感じているチューターもいた。「社会人経験のある留学生から社会人生活についていろいろ教えてもらった。」「研究分野や思考方法など新しい視点を得た。」というように、チューターが留学生を支援するというよりむしろ双方で教えあい、刺激しあう仲間として活動している様子がうかがえる。また、活動全体を「新たな視野をもつことができた。」「自分自身の世界観が広がった。」と評価しているチューターもいた。

最後に、「他国への興味伸張」という項目は、日本人学生への教育的意義として重要なものであろう。17年度から19年度にAキャンパスにおいて交換留学制度を利用した学生のうち実に7割強がチューターの経験者であることから、チューター活動が実質的に留学への興味伸張にもつながっていることが考えられる。あるチューターは、アンケートの中で「自分が留学したときにその国の学生が留学生をどう見るか考えることができた。相手に頼っても大丈夫なんだ、そんなにいやとは思われないだろうと安心することができた。」と述べており、日本人チューターが留学生に、将来留学をする自分の姿を重ね合わせる様子がうかがえた。

チューター制度を通してはじめて留学生と話をしたという学生は少なくない。日本人学生には積極的に留学生との交流に踏み出すことに躊躇がある（高井・田中、1993）ともいわれており、留学生と日本人学生間ではなかなか自然発生的な交流は生まれにくい。そのような中でチューター制度に参加することによって、留学生と直接触れ合うという異文化接触を経験することそのものに意義があるのではないかと考えられる。

3.2. チューター活動における困難点

次に、日本人チューターは、チューター活動でどのようなことに困難を感じたのだろうか。表2は日本人チューターの自由記述に見られたチューターの学びである。

表2 日本人チューターの感じる問題点

問題点のカテゴリー	H17	H18	H19	計
1. 日本語を教えるのが難しい	14	8	15	37
2. 説明ができない、説明力が不足している（含専門学習）	12	5	18	35
3. 意思のすれ違い	5	2	2	9
4. 時間調整の難しさ	8	5	3	16
5. (留学生の日本語力に起因する) 会話の難しさ	1	1	3	5
6. 手助けできないことがない	0	1	1	2
7. 自分の専門知識の少なさ	4	0	2	6
8. 人間関係（開始、継続）の難しさ	3	2	1	6
9. その他	1	3	2	6

〈具体的な記述内容〉

- ・相手が言いたいことを日本語で言い換えるとどうなるのか考えるのが大変でした。
(1. 日本語)
- ・最初のころは自分の説明の下手さにいやになりました。
(2. 説明力不足)
- ・自分がよくわからないもの(微分積分)を説明するのは大変だった。
(7. 自分の専門知識の少なさ)
- ・相手との距離のとり方が難しい。
(8. 人間関係)
- ・Aさんは携帯電話をもっていなくて、キャンセルのときの連絡が大変だった。(4. 時間)
- ・生活習慣の違いから考えがかみ合わなかったり話している内容がわからなかったりすること。
- ・言葉が通じているのかいないのかわからない。相手がうなづいても何度も確認したほうがいい。
- ・互いに「チューター活動」への意識が違っていた。相手は頼んだこと全般をやってほしかったようだが、私は日本語の修正がメインだと思っていた。(3. 意思のすれ違い)

チューターが困難点として挙げているものの中で最も多かったのは、日本語がうまく教えられないという点だった。これはAキャンパスの事情もある。Aキャンパスは、学部1年生と交換留学生の割合が多く、日本語のサポートが重要な内容であるため、チューターが日本語の添削や日本語の文法などについて質問を受けることも多くなる。本格的な日本語教育に関する相談は、留学生センターや留学生相談室に相談するよう助言しているが、身近なチューターにどうしても依頼や質問が集中してしまうようだ。

また、約束やルール、時間を守るという基本的な態度も活動やペアの関係性に影響を及ぼす重要な一因である(新倉、2000)が、双方の様々な事情で調整が難しかったり、時間が守られないケースがあるようだ。それによって、活動があまり行われずに学期が終わってしまったり、最初は活発であったにもかかわらず、後半で活動がなくなっていくこともある。

さらに、話がかみあわない、言葉が通じているのかわからないといった異文化間コミュニケーション上の葛藤に困難を感じていることがわかる。チューターは、そのすれ違いを生活習慣の違いのため、言葉のため、意思のすれ違いなどのようにとらえていることがわかる。こういったすれ違いは、異文化間接触の中では起こりうることであり、チューターにとってむしろ、その経験をどのように克服するか、そこからどのような学びを得るかが重要であると思われる。「意思のすれ違い」については、5. チューター活動における意思のすれ違いで、さらに詳しくみていくことにする。

4. 留学生の学びと問題点

一方、留学生は、チューター活動の意義や問題点をどのように捉えているのだろうか。以下の表3は留学生がチューター活動において感じたメリット、表4は留学生がチューター活動において感じた困難点である。

表3 留学生の感じるメリット

メリットのカテゴリー	H17	H18	H19	計
1. 学習・研究の手助け	24	3	12	39
2. 日本語力の向上・日本語会話の機会提供	27	1	14	41
3. 日本文化、習慣への理解促進	4	0	4	8
4. 友情の成立	5	0	1	6
5. 生活情報、大学情報の提供	4	1	4	9

チューター活動における困難点

表4 留学生の感じる問題点

問題点のカテゴリー	H17	H18	H19	計
1. (自身の日本語力の不足による) コミュニケーションの難しさ	10	1	7	18
2. 時間調整の難しさ	2	1	0	3
3. 専門分野のずれ	1	0	0	1
4. 友情の不成立	1	1	1	3

留学生側のチューター活動の意義は、大きく日本語のサポートと、学習、研究の手助けに2分されている。アンケートの具体的記述を見ると、サポート内容は、宿題の手伝い、レポートの書き方の指導、レポートのチェック、日本語の添削、プレゼンテーションのチェック、レジュメ作成補助数学や理科の学習など、主に大学の授業を受ける際のサポートに関するものや、日本語能力試験の勉強、漢字学習、天声人語のまとめ、発音練習、音読の練習相手など日本語学習に関するものを中心に様々なものが挙げられており、留学生が日本人チューターから様々なサポートを受けていることがわかる。基本的なチューターの役割は達成されていると考えていいだろう。

また、その他にも少数ではあるが、日本人の友人ができてうれしかったという留学生もいた。さらに「(同じゼミの) チューターのおかげで、みんなと早く親しくなれた。」「他のいろいろな友達も紹介してくれたので、日本に来たばかりのときからさびしいという感じがぜんぜんなかった。」というように、チューター活動が、チューターと留学生という関係から、より広く人間関係を広げるきっかけになったケースもあったようである。

一方、留学生の感じるチューター活動上の困難点は、「ありません」と記載されていたものが多かったため、問題として挙げられていたものは少なかったが、その中でも、「コミュニケーションの難しさ」が最も多く、その原因を自分自身の日本語能力に帰属させているものがほとんどであった。その他に、チューター同様、時間調整の問題、さらには少数ではあるが、友情の不成立を挙げた留学生がいた。

次に、留学生が感じていたこのような問題点、日本人チューターが感じていた問題点をペア間ではどのように理解していたのか、あるいはしていなかったのか、ペアことの記述が見られるものについて次に見ていきたい。

5. チューター活動における意思のすれ違い

留学生と日本人チューターのペアでアンケートが提出されており、その内容が比較できるものを対象に、3.4. で見た問題点をお互いにどのように認識していたのかわかるものを一部抜粋した。Nは日本人チューターで、Rは留学生の記述で、以下の1から3までは、留学生側が何かしら「ずれ」を感じていたが、日本人チューターには十分伝わっていなかった例である。

1. R 会話の中で違い（日本語の誤り？）があっても教えてくれなかった。残念だった。
N 日本語がうまく通じないときがあった。活動は自分にとって毎回とても新鮮で、楽しいものだった。
2. R チューターの関係は、チューターにとどまって友達になれないのがします。
N プライベートでも一緒に遊びにいけないと仲良くなれた。楽しかった。
3. R 新しい友達はできなかったんですが……。親しくなれてよかった。
N チューター活動で学んだことはK国語。

1では、留学生には日本人チューターに期待した役割が日本人チューターには認識されておらず、留学生に不満が残ってしまった例である。日本人チューターのほうは活動は楽しかったとしているが、何かうまく通じないところを感じている。

2, 3では、留学生側が日本人チューターとの友人関係を期待していたにもかかわらず、期待はずれで終わっていることを示している。2の双方のコメントは対照的だが、それぞれに「友人」に対する考え方のギャップがあることも考えられる。留学生からは、ただ一緒にご飯を食べたり遊びに行ったりするのが「友達」ではないという声もよく聞かれる。日本人チューターにとっては外国人である留学生とのふれあいそのものが新鮮で刺激的な経験であり、親しくなった満足があるのかもしれないが、自国のコミュニティを離れ一人で留学生活をはじめた留学生側はもっと親密な付き合いをもとめていたのかもしれない。3のペアも、日本人チューターはどちらかというと留学生を語学学習のリソースと考えて交流していたのに対し、留学生側はより親しい友人関係になることを望んでいたようだ。

一方、以下の4から7までは、日本人チューター側はなにかしらの問題を感じているが、留学生側にはうまく伝わっていなかった例である。

4. R なんでも相談できてよかった。(来学期も) 続けてやろう!
N A国人の留学生だけで集まるとA国語で会話が始まってしまい参加できなかった。
5. R いつもがまん強く教えてくれた。ありがとう。
N 時間を重んじる概念が違わらしく、ルーズで困った。
6. R ぼくがあまり活動をやらなかったのでごめん。2人ともチューター活動をどうやってなにをやればいいのかわからなかった。
N 留学生があまり学校にこないのが困った。留学生がなにをしたいのかよく聞いて、チューターが主体になるのではなく、必要なサポートを与えるというのが大事。
7. R Aさんは本当に親切と熱心な人です。
N 日本では考えられないようなボディータッチに困りました。

4では、留学生同士が外国語で会話しているところに入れずにとまどっている日本人チューターの様子がうかがえるが、日本人チューターがこの点を留学生に話したのか、留学生がこの点に気がついてたかどうかは、アンケートからは明らかではない。ただ、このペアは次の学期は継続せず、他の日本人チューターに交代している。

5に類似する時間感覚や約束についての概念に関する指摘は多く見られた。しかし、5では留学生からのコメントはむしろ好意的で、日本人チューターの困惑は伝わっていないように思える。それは、7のボディータッチというノンバーバルコミュニケーションへの戸惑いについても同じで、日本人チューターの困惑はここでも留学生に伝わっていないようだ。

6のペアでは、活動があまりうまく進まなかったペアのコメントだが、留学生側はチューター活動を何をしたらいいかわからず困っていた様子であるのに対し、日本人チューター側はあくまでも留学生が主体になって活動を行うべきだと考えており、その結果、実質的な活動に進めずに終わってしまったことが考えられる。

6. 結果のまとめと今後の展開

6.1. 結果のまとめ

日本人チューター、留学生双方のアンケートの記述から以下のことが考えられる。

- 1) 日本人チューターは、チューター活動を自分自身にメリットのあるものとして積極的に評価していることが多い。それは、他国の文化習慣の理解にはじまり、自文化との差異や共通点を見出すこと、さらには、他国への興味伸張から、留学への興味にもつながっているのではないかと考えられる。また、チューター活動を自分自身の学習や研究にもプラスになり、また自己成

長にもつながるととらえている日本人チューターもいた。

- 2) 日本人チューターは、チューター活動において、学習支援の具体的な方策に対する困難に加え、留学生とのコミュニケーションのとり方に困難を感じているケースがある。
- 3) 留学生は学習支援の制度としてのチューター活動を積極的に評価しているが、自分自身の期待と異なっているケースもある。

これらの結果から今後の課題と、その方策を以下に述べる。

6.2. 今後の課題と方策

まず、チューターの感じている具体的な学習支援における困難であるが、これについては、本学においても随時留学生相談室で相談を受け付け、直接的、間接的な支援をしているが、それだけでは十分であるとはいえない。伊藤（2007）は、留学生の学習は、個別対応では限界があるとして、留学生相談室において、チューター本人だけでなく、留学生や指導教官と連絡を取り合うなどして介入し、問題を解決できたとしている。本学においても、特に今後は指導教官との連携も重視してより多層的なサポート体制にしていく必要がある。

また、留学生、チューター双方の問題としてコミュニケーションの不十分さがうかがえた。やってほしいことがあるのに伝えられていない、何をしたらいいかわからなくて困っているのに伝えられない、相手の態度に困惑しているのにそのまま黙っているということでは、お互いの気持ちがお互いにずれ違い、良好な関係を維持していくことは難しくなるだろう。新倉（2000）は、率直に話し合える自己開示がチューターと留学生の関係に影響を及ぼす一因であることを明らかにしているが、同時にチューターにとっても留学生にとっても、誤解や不愉快に思うことをどのように伝えるかは困難な作業であり、特に異文化では誤解や摩擦を生じやすいとしている。そこで、この問題を解決するために、どのような支援が可能か、以下の2点の具体的な方策をあげておきたい。

(1) チューターオリエンテーションの内容の充実

現在もチューターオリエンテーションは行われており、事例検討も行っているが、そこに、アサーティブコミュニケーショントレーニング（平木、2003）のような異文化間コミュニケーションに役立つコミュニケーショントレーニングを組み込むことは意義があると思われる。アサーティブコミュニケーションは、自分の意見や主張を、相手の立場も自分の立場も大切にしながら率直に伝える方法であり、会話による一つの葛藤解決方略であるといえる¹⁾。オリエンテーションの限られた時間内では十分なトレーニング時間は持てないが、率直な意見交換がよりよい関係性を作ることを、チューターと留学生双方に理解してもらうことができるだろう。

(2) チューター活動と、教養教育科目との制度的連携

チューター活動における戸惑いや困惑、摩擦や誤解はむしろ異文化理解の重要なきっかけであると考えられる。そのため、今後、異文化間コミュニケーションに関する教養教育科目にチューター活動

への参加を組み込み、活動の経験を講座の中で見つめなおすことができれば、異文化理解は、他文化理解のような表面的な理解からさらに一歩進んだ深い理解を目指すことができるだろう。特に文化の違いによる価値観の差やそれに伴う行動の意味づけ、異文化間の葛藤への対処法について学ぶことは意味があるのではないだろうか。このような講座では、異文化理解を単に理論としての知識のみでなく実践に裏打ちされた経験知として理解することができるだろう。それが、今後国際社会を生き抜いていく日本人学生の力に、また、日本という異文化の中で留学生生活を営んでいく留学生の力になっていくのではないだろうか。

【付記】

本稿は、群馬大学教育研究改革・改善プロジェクト事業・公開研究会「グローバル化に対応した教養教育—留学生教育の視点から見えてくるもの」における発表原稿を加筆修正したものです。研究会において活発な議論と貴重なコメントをいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

【注】

- 1) アサーショントレーニングは主張訓練法の一つでありアメリカの女性解放運動の中から誕生したものである。平木 (2003) では「アサーション (Assertion) を、自分も相手も大切にしたい自己表現であり、自分の気持ち・考え・信念などが正直に率直にその場にふさわしい方法で表現される。そして相手が同じように発言することを奨励しようとする」と述べており、日本へこのトレーニングを導入した。

【引用文献】

- 櫻田千采・島弘子・松下美知子 (2000) 「チューターの異文化理解とチューター制度について—チューターからの報告を中心とした実態調査より」『金沢大学留学生センター紀要』 3, 77-84
- 水本光美・池田降介 (2005) 「日本人学生は学部留学生のためのチューター活動を通して何を学んだか」『北九州市立大学国際論集』 3, 79-86
- 伊藤恵美子 (2006) 「下関市立大学における留学生教育—支援から異文化間理解へ—」『留学生教育』 11, 87-99
- 伊藤孝恵 (2007) 「チューター活動と留学生相談の支援—山梨大学の事例から—」『山梨大学留学生センター紀要』 3, 3-11
- James P. LASSEGARD (2005) 「The Role of Peer-Pairing in International Student Support: An Examination of Tutoring Activities at Universities in Japan」『留学生教育』 10, 47-60
- 瀬口郁子・田中圭子 (1999) 「チューター制度の運用に対する提言—満足度と教育効果の観点からの一考察」『神戸大学留学生センター紀要』 6, 1-17
- 高井次郎・田中共子 (1993) 「日本人学生の社会的行動—留学生のための日本的ソーシャル・スキルの検討—」『社会心理学研究』 7 (2), 92-101
- 平木典子 (2003) 『アサーショントレーニング —さわやかな〈自己表現〉のために—』日本・精神技術研究所, 24-25
- 新倉涼子 (2000) 「チューターと留学生の友人関係形成と性格の特性や行動に関する相互認知」『異文化間教育』 14号, 99-116

Cross-cultural understanding of a Japanese student and foreign student in tutor activity

— An investigation from free description of a questionnaire after tutor activity —

SONODA Tomoko

A tutor system offers both Japanese and Foreign students a unique opportunity to broaden cross-cultural understanding, expanding on the system's educational significance. However, because the tutor system relies on the relationship between two students, the possibility of interpersonal and/or other conflicts becomes a consideration. Managing the system flexibly and providing step by step responses to conditions between the foreign and Japanese student could therefore be a major benefit to the tutor system.

In this report I will attempt to clarify the benefits and potential conflicts inherent in the tutor system, referencing evaluations provided by both foreign students and Japanese tutors in a three year study at Gunma University.

Moreover, I will examine the differences between student evaluations and consider what kind of support on tutor activity will be necessary in the future.